

## コメニウスの教育学構想における人間観

その他のタイトル	The View of Man in J. A. Comenius's Pedagogy
著者	中城 進
雑誌名	教育科学セミナー
巻	19
ページ	21-31
発行年	1987-12-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00019504">http://hdl.handle.net/10112/00019504</a>

# コメニウスの教育学構想における人間観

中 城 進

## (I) はじめに

ヨハン・アモス・コメニウス (Johann Amos Comenius : 1592 ~1670)<sup>(1)</sup> は、“近代教育の父”という教育学的位置を与えられている。また、「封建制から資本主義への過渡期におけるもっとも重要な教育学者」<sup>(2)</sup>とも言われる。「学校では、あらゆる者が (Omnes) あらゆる事柄を (Omnia) 教わらなければならない」<sup>(3)</sup> というコメニウスの主張により、彼はあらゆる種類の人間を含む人類全てに共通する教育の普遍的理念を掲げた者として理解されている<sup>(4)</sup>。

私がコメニウスを再読するようになった動機は、近代教育への湧き起こる疑問からである。近年の、教育や発達に関しての過熱した激烈な論争から、私は多くのことを学んだ。そして、“教育”や“発達”と呼ばれてきたものに対して、根深い疑問を持つことになった。この疑問を解くためには、“教育”や“発達”と呼ばれてきたものを徹底的に根源から問い直すべきであろう。この再考の作業にあたっては、現代的な論争だけに限定せずに、時を昔に遡って“教育”や“発達”の成立期の事情を深く検討しなければならないであろう。そこで、“近代教育の父”といわれるコメニウスの著作を検討することにした。

実際に自身の眼でコメニウスの著作を熟読してみると、七年前にジャン・ピアジェのある著作<sup>(5)</sup>を読んだ時と同じ種類の“うしろめたさ”を感じてしまった。この“うしろめたさ”こそ、私が“発達”なるものに疑問を持ち始めることになった原因なのである。このような“うしろめたさ”を私に感じさせるものは、コメニウス

の教育学構想における人間観にあるように思われる。そこで、当論文においては、コメニウスの生きた時代的・社会的状況を把握し、その状況のなかで生き抜いたコメニウスの教育学構想の動機を探り、その教育学構想の根底にあるコメニウスの人間観とその意味を探求する。

## (II) コメニウスとその時代

コメニウスは、1592年 5月28日、モラヴィアのニヴニツ (Nivnitz) のボヘミア同胞教団の信仰厚いチェク人の家に生まれた。当時、ボヘミアはハプスブルグ家の支配下にあった。多くのドイツ人がボヘミアに入植し、政治的・経済的な実権を握るようになっていた。公用語はチェク語であったが、ドイツ語が支配的地位を占めるようになってきたため、ボヘミア議会はチェク語擁護の法律をつくらねばならなかった (1615)。ハプスブルグ家とボヘミア議会との間の緊張状態は、ハプスブルグ家の二人の代官と書記官の三人をフラッチャニ城の窓から投げ落とした“窓外投出事件”が引き金となり、ボヘミア議会在フェルディナンド二世を廃してハプスブルグ家を閉め出し、その財産を没収して、カルビン派のファルツ選帝侯フリードリヒを王位継承させた事件で壊れることになった。当然の事ながら、ボヘミア同胞教団は、反ハプスブルグ家と反カトリック教権という態度を打ち出した。雌雄を決する白山の戦いで、ハプスブルグ家が勝利を占めた。その結果、カトリックは国境となり、反カトリックの宗教は禁じられ、その牧師達は国外追放を宣告された

(1621)<sup>(6)</sup>。1621年に、ハプスブルグ家支配下のスペイン軍がフルネックに侵入し、市街を焼き払った。コメニウスは、「神より与えられし職業を奪われ、未来を奪われしのみならず、また多くの貴重なる過去（即ちその文庫、その手稿）をも奪われた」（モンタヌスへの書簡）<sup>(7)</sup>。また、そればかりか、コメニウスは愛妻と子どもを失い、失意の底に投げ込まれることになった。

ボヘミア同胞教団の牧師達はハプスブルグ家の迫害を受け、逃亡生活を送らざるを得なくなった。コメニウスも、他の牧師達と共に国内で、逃亡の生活を送った。その不幸のどん底の逃亡生活の中で、コメニウスは苦悩し、現世に対して絶望感を抱くようになった。彼は社会に対して激しい怒りと憎悪を感じた。コメニウスは、この世の至る所には悪徳、墮落、闘争、苦悩等が満ち溢れているとする痛烈な社会批判を行なった。そのあまりの嘆きの深さ故に、コメニウスは現実世界に対して逃避的で厭世的な態度を形成しつつあった。また、それと共に、現世に対する究極の絶望感からの救いと安息を希求するために、神への絶対帰依を熱烈に抱くようにもなった。

### （Ⅲ） コメニウスにおける教育学構想の 動機

コメニウスが教育学に取り組む動機は、祖国モラヴィアの復興にある。権勢を思うがままにふるっていたハプスブルグ家やカトリック教会を打倒し、祖国モラヴィアを復興し、またボヘミア同胞教団を再興することをコメニウスは願っていた。それは、悪徳で染まったこの現世に神の王国を築き上げることであった。コメニウスがこのような動機を抱くようになるためには、コッター（C.Kotter）の予言に出会わなければならなかった。

#### （i） コッターの予言とコメニウスの“教育的回心”

1625年、コメニウスは、ポーランドで予言者クリストーフ・コッターの予言に出会う。それは、“カトリック教会およびハプスブルグ家が没落し新教諸国が勝利をおさめ、キリストが再来して、一千年続く平和な国が出現する”という予言であった。コメニウスは、この予言を歓喜して受け止め、神が現世で勝利をおさめることを確信した。コメニウスは、それまでの逃避的で厭世的な態度を捨て去り、現世に神の王国を築き上げることに自らの人生を捧げることを決意したのであった。

1627年、ボヘミアの貴族、トラウテナウ（Trautenau）のゲオルク・フォン・サドウスキー（Georg von Sadowsky）の下で庇護を受けていた時、コメニウスの同僚のスタデウス（Johann Stadius）がその好意に報いるためにサドウスキーの三人の子どもの教育を行うことにし、その方針をコメニウスに相談していた。このような日々に。ウィルシッツ（Wilcitz）の城内のシルベリ（Nobiliffimi D.Silveri）の所有する文庫の見学を行い、そこでエリアス・ボジン（Elias Bodini）の『教授学』に出会い、所謂“教育的回心”を遂げた。祖国の復興のためには青少年の力が必要であると考えていたコメニウスは、ボジンのような教育書をチェック人の青少年の教育のためにチェック語で書くことを思い立ったのであった<sup>(8)</sup>。それ以後、コメニウスはラトケ（Wolfgang Ratke）、ルービン（Eilhard Lubin）、ヘルヴィーク（Christoph Helwig）、リッター（Stephan Ritter）、ボジン、グラウム（Philip Glaum）、フォーゲル（Johann Vogel）、ヴォルフシュチルン（Jakob Wolfstim）、アンドレアエ（Johann Valentin Andreae）、フレー（Jean Cecil Frey）等の

教授学の研究を行うことになった<sup>(9)</sup>。1628年に、コメニウスは家族（1624年に再婚）や同僚と共にポーランドのリッサの領主ラファエル伯の下に亡命する。この時期以降、コメニウスは、祖国モラビアの再興を目的としてチェック人の子ども・青少年の教育のための教授学の研究に精力を傾けていくことになった。コメニウスは、ギムナジウムでラテン語教科書として使用する『開かれた言語の扉』を1631年に、また『大教授学』を1632年にチェック語で脱稿している<sup>(10)</sup>。

(ii) 祖国復興、ボヘミア同胞教団再興のための人材養成としての教育学構想

コメニウスは、祖国モラビアの独立を、またボヘミア同胞教団の再興を願っていた。また、ボヘミア同胞教団の聖職者でもあったコメニウスは、ハプスブルグ家とその勢力を背景に権勢を誇るカトリック教会とが支配する地上の世界における人間の退廃を憂いていた。

コメニウスは現世を次のようにみた。ハプスブルグ家やカトリック教会が支配している地上の世界では悪がはびこり、人々は善と悪とが混じりあった世界に住んでいる。この地上の世界では悪の数が徳の数よりも圧倒的に多いが故に、人々はそれらの悪に染まってしまう、自らを罪と不信仰とで汚してしまっている。神はこの事態を嘆き悲しんでいる。それにもかかわらず、神は人間に哀れみをたれ、樂園の回復を与えようとしている。

コメニウスは、このような“神の恩寵”に対して、退廃した人間の救済策を打ち出そうとする。そこでは、神の王国に入り得る者として、子ども・青少年に対して期待をかける。しかし、大人にはその期待をかけようとしてはいない。それは、大人は歪んだ教育によって身に付けた悪や俗世間の歪んだ事例によって学んだ悪によって、“幼な子”の魂を失っているからであった<sup>(11)</sup>。

未だその俗悪の退廃に染まらず、わだかまりや世俗の空しい考えや因習にとらわれず、神から既に受けている恩寵を手離していない子ども・青少年こそが正に神の王国の相続人であり、その相続権を天与の特権として持つからであった<sup>(12)</sup>。

子ども・青少年は神の王国の相続人であるとしても、何等かの方法によって俗世の退廃から守られねばならなかった。保護されなければ、神の王国の相続人としての子ども・青少年であっても、地上にはびこる悪によって罪と不信仰とで身を汚されてしまうことになる。そこで、コメニウスは、子ども・青少年を地上にはびこる悪から守るために、充分に考慮された教育の必要性を訴えたのであった。コメニウスは、学校という形態をとる教育を構想した。コメニウスは、「もし私達がよき秩序のある優れた教会（Ecclesiae）と国政（Politiae）と家政（Oeconomiae）を望むのなら、何よりもまず学校を秩序ある場にして学校を優れたものにし、学校が真実の生きた・人間の製作場（veraevivaeque Hominum officinae）となり、教会や国政や家政の苗床（seminarium）となるようにするべきである」<sup>(13)</sup> という。

このような教育学の構想はコメニウスの祖国ボヘミアの復興と彼の属するボヘミア同胞教団の再興と、人々の救済にあった。このような事業をなすためには、宿敵であるハプスブルグ家やカトリック教会と戦い、これらを打倒しなければならなかった。このような目的を持った戦いのためには、洗練され教育されたチェック人の人材が数多く必要であった。コメニウスは、その人材を養成し確保するためには、子ども・青少年に対する合理的また効率的で組織的な教育の取り組みが必要不可欠であると考えたのであった。

#### (IV) コメニウスの人間観

コメニウスの教育学構想を検討する作業に先立ち、その構想を生み出す力の裏付けともなる人間観が明確にされておかなければならないであろう。まさに、それが当論文の課題である。

コメニウスの人間観は、彼の所属するボヘミア同胞教団のキリスト教と、また彼の生きた激動の時代と不可分の関係にある。彼の人間観を、現代に生きているわれわれが先入観として保持する人間観や自然観や思考の様式・枠組から理解しようとする、コメニウスが意味しようとしていたそのもの自体を把握することができなくなる。“現代人の眼”からの理解の仕方ならば、コメニウスの主張には理論的には数多くの矛盾が混在しているように思われるかもしれない。コメニウスの真の意図を本当に理解しようと思うなら、彼の生きた時代の考え方・感じ方を踏まえてアプローチしなければならないであろう。

##### (i) 人間の生命と究極的目的

コメニウスは、人間の生命を次のようにみる。人間は植物的生命 (*Vita Vegetativa*)、動物的生命 (*Vita Animalis*)、精神的ないし靈的生命 (*Vita Intellectualis, seu Spiritualis*) という三重の生命の形態を生きる<sup>(14)</sup>。それぞれの宿所は母親の胎内、地上および天にある。植物的生命は動物的生命の準備をするものである。それら二つの生命は精神的ないし靈的生命のための準備なのである。精神的ないし靈的生命は、他の二つの生命とは本質的に異なるものであり、人間にとっては究極的目的である。

明らかに、コメニウスは、靈的生命に向かう存在として人間の生命を規定しており、また人間は靈的生命に向かうことを目的としている、としている。この生命観や目的意識は、コメニウスのキリスト教思想との関連で理解しないと

その意図が正確に把握できないことになる。そして、また、コメニウスの教育学の構想自体も、教育による人間形成のための“技術学としての教授方法”としてしか理解できなくなるであろう。

コメニウスは、人間の究極的目的を、神と共に存る永遠の幸福を獲得することにあるとみていた。地上においては、人間には、最初、視力や聴力やその他の感覚 (*sensus*) が現れる。その次には認識能力 (*intellectus*) が、そしてその後には意志 (*voluntas*) が現れてくる。現世において、このような感覚や認識能力や意志の立ち現れに伴って、人間はその様々な欲望を充足させたり、知恵の探求を行うことが可能となる。しかしながら、人間は、それらの欲望を満たすための活動や探求の活動によっては、決して満たされることがない。欲望の追求や知恵の探求は、際限なく広がりいくものであり、窮めることができない。それ故に、欲望の追求や知恵の探求という行為によっては、人間はその生を満たすことはできないのである。欲望の追求や知恵の探求によって、現世において何等かのものを獲得したとしても、人間の究極的目的には到達することはないのである。人間は益々向上して絶えずより高い段階に登って行くのだが、現世においては究極の最高の段階には到達し得ないのである<sup>(15)</sup>。つまり、コメニウスは、現世において人間が如何ように努力し研鑽しても所詮はひとつの生命の中での高まりにすぎず、人間の究極的な目的である靈的生命という生命の最高段階には到達できない、というのである。即ち、コメニウスは、人間の究極的目的は現世の外にあるとし、地上の生活は精神的ないし靈的生命という永遠の生命に続く序幕 (*proaemium*) であり、また準備に他ならない、ということを明言したのであった<sup>(16)</sup>。

コメニウスは、地上に住まう人間を地上の世界において究極的・目的に到達するための無限の可能性を持った者として把握しているのではなく、また地上に住まう人間に究極的・目的に到達するための無限の努力を求めたわけでもなかった。コメニウスは永遠の生命に到るための準備を人間に求めたのであった。

#### (ii) 永遠の生命への準備と教育的行為

コメニウスは、人間が永遠の生命に到達するには現世においてそのための準備が行われなければならない、という。永遠の生命に到達するための準備とは、①理性を備えた被造物者 (*Creatura Rationalis*)、②被造物の支配者である被造物者 (*Creatura creaturarum Domina*)、③創造主の似姿であり、喜びである被造物者 (*Creatura Creatoris sui Imago, et delictum*) となることである<sup>(17)</sup>。“理性を備えた被造物者”とは、人間があらゆるものの探求者であり、命名者であり、解明者であることを意味する。様々な事物や技術や言語等の学識を求める存在なのである。“被造物の支配者である被造物者”とは、神により創造されしものの中で人間がその頂点に立ち、他の被造物を支配することを意味する。また、様々な人間以外の被造物だけでなく、自分自身の肉の要求に囚われないように自分自身をも支配することを意味している。それ故に、徳性や徳行を身に付けることになる。“創造主の似姿であり、喜びである被造物者”とは、神の完全さを求めることを意味する。神は自らに似せて人間を造られたのであるが故に、人間はその人間の原形としての神の完全さに帰還しようとするのである。

これら三つのことを現世において追求すればするほど、究極的な目的に近付いて行く、という。これこそが人間の現世における生涯の本務 (*εργον*) であり<sup>(18)</sup>、人間の生の目的なので

ある。その他の事 (例えば、健康、体力、容貌、権力、地位、交友、幸運な成功、長寿) は付録であり、生命の外側についた装飾品にしかすぎず、本務には不要で無用な虚飾であり、時には有害で妨げともなる。これら三つのことを成就するための種子は人間の中にある、という。これら三つのことは、永遠の生命に到達するための準備であるのだが、その準備を行うことを神により既に目的として与えられている。つまり、事物を認識する目的、徳行の調和を得る目的、神を愛する目的は、人間には生れつき与えられているのである。それ故に、既に与えられているそれらの目的に、つまり人間が悪に汚される前の (アダムの墮落以前の) 自らの自然に立ち還ることが重要視されることとなる。神の摂理に従うことこそが、つまり神が予め定めておいた目的こそが、人間が生きるための目的となるのである。

コメニウスは、「人間には、何一つ外部から持ち込む必要はない。人間のなかに秘められていたものがその蔽をはがれ、展開し、ひとつひとつのものがその姿を明らかにするだけでよい」<sup>(19)</sup> という。しかし、この事は、地上に生まれ落ちた人間はそのまま放っておいても自力で完全なものに到達するという事を意味するものではなかった。彼は、狼に育てられた人間の例をあげて、人間として生まれただけでは人間にはなれないことをいう<sup>(20)</sup>。十分に良い教育を受けて良く育つならば人間は神に最も近い生き者となる。教育を受けなかったりまた誤った悪い教育を受けるならば地上における最も狂暴な生き物となるという<sup>(21)</sup>。また、人間が本来向かうべき目的が神によって予め決定されているにもかかわらず、その目的の遂行は非常に困難な事であった。現実的には、地上にはびこる悪によって、その目的に向かう人間の心が破壊されてしまい、人

間は悪徳に染まり墮落してしまいがちであった。

それ故に、コメニウスは、人間が本来の意味での人間になるためには、人間が人間として形成されねばならないと主張した<sup>(22)</sup>。つまり、コメニウスは、神が人間に与えた目的（これをコメニウスは“自然”とみるのだが）が遂行されるためには、教育が構想されなければならないと考えたのであった。学識、徳行、敬神を求める目的は予め神が人間に与えているのだが、知識そのものや徳性そのものや神に帰依する心までも神は人間に予め与えた訳ではなかった。それらは祈りや学習によって獲得されるものであった<sup>(23)</sup>。

つまり、目的と共にその目的に近付いていく“形式”は神により与えられているのだが、その“形式”を顕在化していく“内容”は人間がその行為・実践を通して獲得していかねばならぬ、ということであった。言い換えるなら、生命の目的とするとところと、それに到達して行こうとする生命のあり方の形式は既に神によって与えられているのだが、その目的に向かいまたその形式を顕在化するために必要不可欠である知識や技術は獲得なされなければならず、その知識や技術は教育されなければならない、ということである。

コメニウスは、人間が、悪徳に染まることなく、神が与え給うた目的に近付いていくためには正しい知識の獲得が必要であると主張したのであった。正しい知識は悪徳を排し、また神が与え給うた目的に人間を導くものである、とコメニウスは判断しているようである。つまり、コメニウスにあっては、“正しい知識＝善なるもの”という構図がみられる。彼の意味する“知識”は神の国への導きとなるものとして考えられている。コメニウスの汎知体系への希求の動機はここにあったのである。

これらの理解がなければ、現代的な理論的枠組からコメニウスの説を解釈してしまい、“コメニウスは生得説と経験説とを混在させている”という表面的な解釈をしてしまうことになるであろう。

### (iii) “Tabula rasa” 説

このような意味で、コメニウスは、アリストテレス (Aristoteles) を引用して、人間の魂を“Tabula rasa” とみる<sup>(24)</sup>。そして、コメニウスは、人間の魂は“Tabula rasa” ではあるが、そこにあらゆるものを際限なく書き記し続けることができる、と主張した<sup>(25)</sup>。また、人間の頭脳 (cerebrum) を木臘 (cera) に喩え、その自由自在な能力をも、称賛した<sup>(26)</sup>。

このコメニウスの“Tabula rasa” 説は、神が造り給うた人間への賛美であり、またそれは神の王国を地上に招来するための人間の実践に限り無き信頼をも生み出す人間観でもあった。コメニウスのこのような人間への絶大な信頼を内包する人間観は、キリスト教の“原罪”という考え方とは明らかに異質である。事実、コメニウスの『大学授学』の論調には、人間を“原罪を犯したアダムの子”という見方は存在してはいるものの、“原罪”に基づいた論議はない。むしろ、人間に対する絶大な信頼に満ち溢れている。悪徳は社会のなかにこそあり、個人のなかには生まれながらには存在していない、ということのコメニウスは説く。人間とその実践およびその未来に対して、無限の信頼をコメニウスは表現しているのである。これは“原罪”意識を越えた社会意識である。

恐らくは、コメニウスは、意図的に“原罪”を否定して、人間への絶大なる信頼を表出したのではあるまい。聖職者であったコメニウスには、到底、原罪を否定することには思いも到らなかつたことであろう。しかし、実際には、コメニ

ウスの議論と従来のキリスト教の論理との間には矛盾が生じているかのようである。この食い違いは、彼の生きた時代と大きな関係がある。ガリレオ、デカルト、ベーコンたちが活躍したこの時代は自然科学や自然科学的思考が急激に発展している時であり、人間が自然を研究の対象とし、自然を征服しはじめた時代であった。コメニウスのこの“人間への絶大なる信頼”こそ、彼の生きた時代の精神であろう。それは、まさしく、近代の精神である。原罪を犯したアダムの子ではあっても、人間は万物の頂上に立つ理性的存在であり、人間は自己の理性と行動力とによって世界を切り開いていくことができる存在である、とコメニウスはみるのであった。コメニウスは、「というのも人間は決して一片の木ぎれではない。そうであれば、あなたはそれから一つの立像を彫ることもできるであろう。(それはまったく受動的なものだから)しかし人間は、それに対する機会が与えられればそれに応じて、自分で自分自身を形成する生きた像なのである」という<sup>(27)</sup>。それ故にこそ、「すべてを自己観察と自己発言と自己活動によって教える真に活動的な方法」<sup>(28)</sup>、というように、子供の自発的な学習態度をコメニウスは重視することになったのである。

(iv) 人生の最初の時期 (aetas prima)<sup>(29)</sup> と可塑性

とはいえ、“いつでも、どのようにでも、思いのままに、人間は自由に自己を創造し続けることができる”とは、コメニウスは言ったのではなかった。永遠の生命への準備のための学習には一定の時期というものがあり、その時期を逃せば、その学習は目的通りには行われなくなる、という。人間の頭脳は、子供の時期には柔らかく、外から入ってくるものを自由自在に受け入れることができる、ということをコメニウスは

いう<sup>(30)</sup>。コメニウスは、若木や木臘を例にとり、熟した若い時の可塑性に言及する。若い時は、学習が容易であり、大きな進歩を成し遂げる時であるという。しかしながら、この可能性に満ちた時期を逃すようなことになれば、学習は困難を極めるといふ。コメニウスは、冷たく固まった木臘を曲げようとするするとすぐに折れるように、また枝のひろがり既に決ってしまった木はそのままの姿を続けるように、人間は若い時に悪徳に一度染まってしまう元には戻らない、というのである。それ故に、コメニウスは、人生の最初の時期を(つまり子ども時代を)、永遠の生命への準備のための学習にとって、非常に重要な時期とみたのであった<sup>(31)</sup>。

コメニウスは“Tabula rasa”説を唱えるが、それは“最初に記載すれば、その記載されたものは消去不可・修正不可となり、後々まで人間形成に支配的な影響を及ぼす”というものであった。このように最初に記載される事の重要性を認識するが故に、コメニウスは人生の最初の時期にこそ帆船知体系に基づいた教育的営為が必要不可欠であると説くのであった。つまり、永遠の生命への準備のための学習には教師(大人)の役割(教授、善導)が必要であるということをも意味していた。このような永遠の生命への準備のための学習が与えられるならば、人間は永遠の生命へ近付くように自己を形成していくことになる、というのであった。

コメニウスは、その教育は改革を中心とした学習からはじめなければならない、と説く。これは、教育は自然に従うべきであるというコメニウスの考えからきたものである。コメニウスは、人間の自然を次のようにみる。人間の自然は、事物自体を五感を通じて内部へ刻み込むという“外部感覚の時期”、外部感覚<sup>(32)</sup>によって刻み込まれた事物の写像を想起したり手や舌を

使うことによって逆に刻み出す（表現する）ことを行う“内部感覚の時期”、精密な探究を行うための事物についての真の認識能力と判断力が培われる“精神（Mens）の成立の時期”、あらゆるものに対して正しく自己の支配権をふるう習慣がつく“意志の時期”という順序と形式で展開する<sup>(35)</sup>。それ故に、「いつも、どのような場合でも、自然という案内者に付き従い、自然がその力を次々に表に出してくるに依じて、その力を推し進めるように心がける」<sup>(36)</sup>。ことが教育の役割である、とコメニウスは考えるのであった。

#### (v) 技術の対象

コメニウスは、人間の教育を物質の生産と同じ過程であると類推し、学校を“人間の製作場”として考えた。勿論、彼の時代では家庭内規模の生産場であった。しかし、ここで重要な事は、人間の教育と物質を商品化する生産とがアナロジーとして考えられたことである。つまり、彼は人間の教育を商品の生産と同様な形をとる“人間の生産”として想定し、商品を生産する技術を教育の技術として取り出そうとしていたのであった。ことような発想の下に、コメニウスは、教育を印刷術（Typographia）に喩えて教印術（Didachographia）を主張する。そこでは、子どもは印刷される紙に喩えられている<sup>(35)</sup>。このようなコメニウスの比喩は、まさしく教育という人間の実践を機械論的に理解するところからくる。

このような考え方に立ち、コメニウスは「教授者の数を減らし、しかも現在の方法よりはもっと多数の生徒を教育できる」<sup>(36)</sup> という一斉教授を主張した。これは、生徒の大量収容の可能性を意味し、また経済的に効率的で合理的に運営し得ることを意味していた。機械論的に教育という人間の実践をみるならば、数多くの教師

の教授の実践の分析から、モデル的教授過程がつくられるであろう。モデル的教授過程を踏まえて人間の学習を成立させる方が、経済的には効率的・合理的であろう。このような一斉教授方式をとるコメニウスの教授方法は、大量の人材養成という発想からすれば当然の帰結ではあった。

このように機械論的に教授過程を分析して構想された教印術という技術でもって、子どもたちに永遠の生命への準備のための正しい知識を授けていくことになる。このようなコメニウスの教授学においては、人間は永遠の生命への準備のための正しい知識を“印刷”していくための“白紙”という素材として扱われている。つまり、人間は教育の技術の働きかけの対象として立ち現れている、といえるであろう。このことは、その教育の技術の対象とならない部分は教育学的な関心からはふるい落とししていく、ということをも意味していた。人間への関心が教育の技術の対象となる部分のみに焦点づけられていくことは、人間理解においては機械論的な解釈で十分に間に合うという合意を成立させ得ることである。即ち、コメニウスは、その教育学構想において人間を教育の技術の対象とすることによって、教育学における機械論的な人間観を用意することになったのであった。

人間を教育の技術の働きかけの対象とみることは、人間の自然の成長過程の分析を必要不可欠とした。人間の成長・発達を一般化・法則化する研究の萌芽をコメニウスの人間の自然の描写に見て取れるであろう。このように教授学研究と成長・発達の研究とは極めて密接な形で絡みあって、コインの表と裏の関係のように、成立してきたのであった。

#### (vi) “人間”概念の創出

コメニウスは、「人間として生まれた者には、

すべて教育が必要である」<sup>(37)</sup>として、「学校では、あらゆる者があらゆる事柄を教わらなければならない」<sup>(38)</sup>という教育学の構想を打ち出した。その構想では、貧富や身分の高低や性の違いや知能の優劣や都市とか村とかの出身による区別はなく、すべての子どもが学校に入り教育される対象であるというものであった<sup>(39)</sup>。この構想は、神により生命の目的を与えられている人間は神の前にすべて平等である、というコメニウスのキリスト教思想のあらわれなのであった。

しかし、気付かれ難いことだが、これには例外規定があった。確かに、コメニウスが構想する教育学においては、政治的・経済的地位や出身地や性別やまた知能の優劣や学習の速度を問われて、その教育からは除外されることはなかった。コメニウスは、「神によって感覚ないし精神を拒まれた者でない限り、ひとりも除外されてはならない (Nemo proinde excludatur, nisi cui Deus sensum aut mentem negavit)」<sup>(40)</sup>と主張した。しかし、目をよく開けてしっかりとよく読むならば、このことは、“神によって感覚ないし精神を拒まれた者”は排除されるということである。つまり、コメニウスの教育学構想は“神によって感覚ないし精神を拒まれた者”を排除して成り立っているのであった。“神によって感覚ないし精神を拒まれた者”とは、現代的な表現をとるなら『障害者』というラベルを貼られる人間を意味しよう。コメニウスの“あらゆる者が、あらゆる事柄を”という表現は、事実上は、地上におけるすべての人間を対象としたものではなかったのである。

それにもかかわらず、未だに、コメニウスはあらゆる種類の人間を含む人類すべてに共通する教育の普遍的理念を掲げた者として理解されている。われわれは、コメニウスの著作のなかに明確に叙述されているにもかかわらず、その

書かれている事実をあっさりで見逃してしまう。仮にその叙述を見付けたとしても、その人間観に対しては何の疑問も湧き上がらない。このことは、著作の読み方の問題ではなく、ある条件を満たした者だけが人間であるという人間観がわれわれの頭のなかにこびりついているということであろう。

コメニウスが教育学を構想する際に採用した“人間”の概念は“神によって感覚ないし精神を拒まれた者”を排除していた。このことは、ただコメニウス個人の恣意的な判断ではない。教育学を構想する時に出てきた判断ではあるが、それは社会意識を写し出しているといえよう。このように人間という概念を限定していく背景には、二～三の言葉では語り尽くせない深刻な問題が横たわっているように思われる。また、コメニウスの教育学の構想はキリスト教に立った普遍理念から出発しており、他の宗教を保持する人間をも含むものではない。それ故に、コメニウスの教育学構想を“あらゆる種類の人間を含む人類すべて”を対象としたものだとの解釈は過剰解釈であるように思われる。

#### (v) おわりに

コメニウスの教育学構想の動機は祖国統一とボヘミア同胞教団の復興にあり、その人材養成にあった。コメニウスの教育学構想における人間観は、キリスト教に基づき、かつ近代の精神をも孕んだものであった。また、コメニウスは、人間を教育の技術の対象とし、近代教育における“人間”概念の創出を行なった。

まさに、ここにこそ、私に“うしろめたさ”を感じさせた原因があった。前述のピアジェの著作では、「すべての健全な知能」<sup>(41)</sup>という叙述をする。“すべての健全な知能”という限定を付けて人間の普遍的な真理を追求するという取り組み方は科学的には妥当な方法だとしても、“そこ

で切り捨ててきた人間は、人間ではないのか”という疑問を引き起こす。法則定立後において、救済すべく、“人間である以上その法則に従う”という強引な方便にも納得がいかない。排除した後には救済しようとする“科学とヒューマニズム”の論理にうさん臭さを感じてしまう。人間を法則的に、一般化して、把握しようとする、このような限定された“人間”概念の創出を招かざるを得ないのであろうか。“人間”概念にはこのような限定が付着していることを強く深く認識する以外に、“うしろめたさ”から逃れる方法はないのであろうか。あるいは、他に選択する接近方法があるのであろうか。

#### 《註》

- (1) チェック語読みならばヤン・アモス・コメンスキー (Jan Amos Komensky) という読み方が適切だが、教育学の慣例どおりにコメニウスという読み方を当論文でも採用する。
- (2) ローベルト・アルト、江藤恭二 (訳)、『コメニウスの教育学』、明治図書、1959年。109ページ。
- (3) Comenius, J. A., Opera didactica omnia, Editio anni 1657 lucis ope expressa, Tomis I, pars I - II. Sumptibus Academiae Scientiarum Bohem-oslovenicae, Pragae in Aedibus Academiae Scientiarum Bohem-oslovenicae 1957. pp 44.
- (4) 堀尾輝久、『現代教育の思想と構造』、岩波書店、1971。10ページ。
- (5) ジャン・ピアジェ、竹内良和・吉田和夫 (訳)、『教育学と心理学』、明治図書、1975年。
- (6) ピエール・ボヌール、山本俊朗 (訳)、『チ

ェコスロバキア史』・文庫クセジュ、白水社、1969年、を参考にした。

- (7) 佐佐木秀一、大教育家文庫・12・コメニウス、岩波書店、14ページからの引用。
- (8) Comenius, J. A., op.cit.p.3.
- (9) Comenius, J. A., ibid.p.8.
- (10) 『開かれた言語の扉』は、1640年代以後にヨーロッパ諸国に翻訳され、優れたラテン語教科書との名声を博す。『大教授学』は、1639年にラテン語訳ができあがり、1657年にアムステルダムで教授学著作全集のなかに収められる形で出版された。
- (11) Comenius, J. A., op.cit.p.11.  
マタイによる福音書 第18章 第3句  
「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。」
- (12) Comenius, J. A., op.cit.p.11.
- (13) Comenius, J. A., ibid.p.14.
- (14) Comenius, J. A., ibid.p.17.
- (15) Comenius, J. A., ibid.p.17.
- (16) Comenius, J. A., ibid.p.20.
- (17) Comenius, J. A., ibid.p.22.
- (18) Comenius, J. A., ibid.p.25.
- (19) Comenius, J. A., ibid.p.27.
- (20) Comenius, J. A., ibid.pp.35~36.
- (21) Comenius, J. A., ibid.p.36.
- (22) Comenius, J. A., ibid.p.34.
- (23) Comenius, J. A., ibid.p.34.
- (24) Comenius, J. A., ibid.p.29.
- (25) Comenius, J. A., ibid.p.29.
- (26) Comenius, J. A., ibid.p.29.
- (27) ローベルト・アルト、江藤恭二 (訳)、前掲書。103ページより、コメニウスの文章を引用。

- (28) 前掲書。102 ページより、コメニウスの文章を引用。
- (29) Comenius, J.A., op. cit. p.36.
- (30) Comenius, J.A., ibid. pp.36~39.
- (31) この概念は、現代の心理学における“初期経験”の概念をわれわれに想起させる。
- (32) Comenius, J.A., op. cit. p.165.  
外部感覚とは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五つの感覚のことである。コメニウスは、このなかでは視覚が一番優れていると考えている (Comenius, J.A., ibid. p.171)。また、内部感覚とは、表象力や記憶力等を指している。
- (33) Comenius, J.A., ibid. p.166.
- (34) Comenius, J.A., ibid. p.166
- (35) Comenius, J.A., ibid. p.186.
- (36) Comenius, J.A., ibid. p.186.
- (37) Comenius, J.A., ibid. p.36.
- (38) Comenius, J.A., ibid. p.44.
- (39) Comenius, J.A., ibid. p.42.
- (40) Comenius, J.A., ibid. p.43.  
また別の箇所には、同様な表現で「あらゆる青少年が形成される (ただし、神により精神を拒まれたものは別である)」

とある (Comenius, J.A., ibid. p.52)。

- (41) ジャン・ピアジェ、竹内良知・吉田和夫 (訳)、前掲書。32 ページ。

#### 《付記》

本論文の作成にあたり、貴重な御助言を頂いた関西大学教授・竹内良知先生に感謝いたします。

#### <目次>

- (I) はじめに
- (II) コメニウスとその時代
- (III) コメニウスにおける教育学構想の動機
  - (i) コッターの予言とコメニウスの“教育的回心”
  - (ii) 祖国復興、ボヘミア同胞教団再興のための人材養成としての教育学構想
- (IV) コメニウスの間人観
  - (i) 人間の生命と究極的目的
  - (ii) 永遠の生命への準備と教育的行為
  - (iii) “Tabula rasa” 説
  - (iv) 人生の最初の時期と可塑性
  - (v) 技術の対象
  - (vi) “人間” 概念の創出
- (V) おわりに